



2018年7月21日(土)・22日(日)
於 国立オリンピック記念青少年総合センター

目次

2018年度 哲学若手研究者フォーラム案内 3

テーマレクチャー「現代現象学」講演要旨(五十音順)

池田 喬 (明治大学)	「行為のなかの意図? ——現代現象学とハイデガー——」..... 5
植村 玄輝 (岡山大学)	「志向的経験としての行為 ——意志の現象学の観点から」..... 7

個人研究発表 発表要旨(発表順)

富樫 駿太郎 (東京大学)	『省察』『第六答弁』における 「内的認識」について」..... 9
鹿野 祐嗣 (日本学術振興会特別研究員 PD)	「無意識の反復と「解放する」死の本能 ——『差異と反復』における無意識の強度的な システムと三つの受動的総合について——」..... 10
岸 俊輔 (東京大学)	「哲学的論争において直観はどのように 用いられるべきなのか」..... 11
飯塚 舜 (東京大学)	「D. ヒュームにおける概念規定としての知覚」..... 12
内藤 慧 (東京大学)	「ドゥルーズ『意味の論理学』における 物体・非物体の二元論を巡って」..... 13
遠藤 進平 (アムステルダム大学)	「次元的様相実在論」..... 14
尾崎 健太郎 (無所属)	「ヒュームの道徳哲学における 「性格」について」..... 15
濱田 明日郎 (京都大学)	「哲学にとってリズムとは何か」..... 16
大畑 浩志 (大阪市立大学)	「認識不可能な二つの個体を個別化するものとして、 基体ははたして適切か」..... 17

繁田 歩 (早稲田大学)	「カントをマイノリティ主義的に解釈する試み」・ ・ ・ 18
日隈 脩一郎 (東京大学)	「ベルクソン哲学における「空間化」の諸相、 その第一歩」・ ・ ・ ・ ・ 19
佐藤 広大 (慶應義塾大学)	「毒パズル・BMI・恩返し」・ ・ ・ ・ ・ 20
末田 圭果 (大阪大学)	「ショーペンハウアー意志の否定についての新解釈を 巡って」・ ・ ・ ・ ・ 21
朱 喜哲 (大阪大学)	「ブランダム単称名辞論とその射程」・ ・ ・ ・ ・ 22
米倉 悠平 (千葉大学)	「J・S・ミルによる功利性原理の「証明」は ミルの功利主義理論のどのような目的に 貢献しているか」・ ・ ・ ・ ・ 23
京念屋 隆史 (慶應義塾大学)	「なぜ時間と変化は不可分なのか ——フッサール初期時間論における 「絶対的意識流」の比喩」・ ・ ・ ・ ・ 24
浅川 芳直 (東北大学)	「論理的真理と永久文」・ ・ ・ ・ ・ 25
水上 拓哉 (東京大学)	「対話システムの倫理におけるカプトロジの意義」・ 26
小島 雅史 (一橋大学)	「フッサール現象学における生活世界の構成と 正常性」・ ・ ・ ・ ・ 27
苗村 弘太郎 (京都大学)	「物語的説明モデルに規範的提言は可能か」・ ・ ・ 28
石田 終 (東京大学)	「「あいつも差別してるじゃんか」 ——二階の差別の悪さにかんする予備的検討」・ ・ 29
中村 魁 (京都大学)	「「前提化構造」とその批判 : ジョルジョ・アガンベンにおける存在論の問題」・ 30
丸山 文隆 (東京大学)	「ハイデッガー『存在と時間』における 超越論的問題設定について」・ ・ ・ ・ ・ 31
原田 夏樹 (慶應義塾大学)	「知覚の許容内容と認知的侵入可能性」・ ・ ・ ・ ・ 32
山野 弘樹 (東京大学)	「物語を生きるということーリクルの「ミュトス」 ー「ミメシス」概念についてー」・ ・ ・ ・ ・ 33
藤野 幸彦 (神戸学院大学)	「映画としてのアニメーション」・ ・ ・ ・ ・ 34

ワークショップ 発表要旨 (発表順)

木本 周平 (首都大学東京) ほか	「分割と抽象——アリストテレスから現代まで」・ ・ 35
各種お知らせ・運営委員一覧	・ ・ ・ ・ ・ 36
アクセス	・ ・ ・ ・ ・ 38
打ち上げ場所地図	・ ・ ・ ・ ・ 39
司会協力者一覧	・ ・ ・ ・ ・ 40

◆◆ 2018年度 哲学若手研究者フォーラム案内 ◆◆

今年度も皆様のご協力のおかげで、フォーラムを開催できることを運営委員一同大変嬉しく感じています。今年度も個人発表の司会を運営委員以外の方をお願いすることになりました。そのことについて、簡単ではありますが、まず初めに司会を引き受けてくださった方々にこの場を借りてお礼申し上げます。(協力者一覧 40頁)

日程

開催日： 2018年7月21日(土)・22日(日)

受付開始時刻： 8:30

受付場所： センター棟5F

会場

国立オリンピック記念青少年総合センター

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3番1号

Tel 03-3469-2525 (代表)

アクセス

[電車]

- ・東京駅から：JR中央線 約14分 新宿駅乗り換え
小田急線各駅停車 約3分 参宮橋駅下車 徒歩約7分
- ・小田急線：参宮橋駅下車 徒歩約7分
- ・地下鉄千代田線：代々木公園駅下車(代々木公園方面4番出口) 徒歩約10分

[京王バス]

- ・新宿駅西口(16番)より 渋谷駅行き(宿51)乗車 代々木五丁目下車
- ・渋谷駅西口(14番)より 新宿駅西口行き(宿51)乗車 代々木五丁目下車

手荷物について

フォーラムでは、荷物のお預かりは行っておりません。各自で、貴重品等の管理をお願い致します。また、センター棟1Fにコインロッカーがございますので、適宜そちらをご利用ください。

食事

初日・二日目昼食、二日目(宿泊の方の)朝食は、ご用意しておりません。

また、厳守していただきたい点ですが、オリンピック記念青少年総合センターへの弁当

の持ち込みは禁止されています。センターに入る前にお食事を済まされるか、センター内の食堂をご利用ください。

駐車場について

地下駐車場があります。200 台収容、入庫は 6：30－23：00、普通車で 8 時間未満 30 分 150 円、それ以降は 30 分 50 円です(入庫後 30 分未満で出庫する場合は無料)。

ご宿泊の方へ

国立オリンピック記念青少年総合センターにはリンスインシャンプー、ボディークリーム以外（タオル・歯ブラシ等）は用意されておりませんので、その他必要なものは、各自ご用意ください。初日懇親会后、各お部屋へ運営委員がご案内いたします。また、二日目朝は、9:00 までに朝食と部屋の清掃をお済ませください。

一日目懇親会について

会場：国際交流棟レセプションホール 1
時間：18：30 ～

二次会について

懇親会後の二次会はこちらで用意しておりません。各自、責任をもって行動して下さい。

二日目打ち上げについて

会場：PRONTO 代々木店（代々木駅北口より徒歩 1 分。地図 47 頁）
<http://www.pronto.co.jp/shop/detail?shopid=0353512630>
時間：18:30～
予算：4000 円程度を予定

全体会について

全体会は、若手フォーラムのあり方について意見交換をする場です。決算報告や次期運営委員の承認も行われます。今年度は二日目、全ての研究発表終了後に行います。特に参加者の皆様の積極なご出席を期待しております。

行為のなかの意図？ ——現代現象学とハイデガー——

池田喬（明治大学）

冷蔵庫から缶ビールを取ろうとして、書斎の椅子から立ち上がり、キッチンに入り、電気を付け、冷蔵庫の扉を開き、ビールをつかむ。

自動車で職場に行く途中、ギアを2から3に変える。

テニスをプレイしているとき、飛んできたボールを跳ね返す。

手書き原稿をタイプしているとき、キーボードのFを押す。

無意識のように行っていることでも、「何をしているのか」と聞かれれば、私たちは観察によらずに即座に答えられる。観察知とは根本的に異なるこの自己知の存在は、驚嘆の対象になっただけでなく、ある行為がどういう記述のもとで意図的であるかを識別するための基準という、行為論にとって重大な機能を担わされてきた。しかし、即答できるという事実を確認することは、その行為の最中に私がこの行為をいかに経験しているのか、意図的であるとはいかなる心的状態なのかを解明することではなく、むしろこうした問いを謎として残す。さらに言えば、この事実確認は、その経験のなかに意図と呼ぶにふさわしい何かが含まれていることを確認するわけでもない。先の謎を探究した結果、自らの行為について非観察的に報告できるという事実はその行為の意図性とは関係ない、という可能性も残されている。

本発表の目的は、J. サールが「行為のなかの意図 (intention in action)」と呼んだ志向性を現象学的に探究することである。ではなぜ、行為のなかの意図を「現代現象学とハイデガー」なる副題を掲げる考察の対象にするのか。

まず歴史的理由がある。サールは、二〇世紀の哲学界において現象学の専用領域のように語られてきた志向性を論理分析と彼が呼ぶ手法で体系的に説明した第一人者であるのみならず、それによって現象学は用済みになったと考えていた。彼はカリフォルニア大学バークレー校の同僚であったハイデガーの解釈者 H. ドレイファスと、それぞれ分析哲学と現象学の代表者として、行為のなかの意図をめぐる論争を九〇年代から十年近く繰り広げた。サール・ドレイファス論争は、行為や志向性への現代現象学的なアプローチを展開するための良い出発点になろう。

次に、本企画に先行して出版された書籍『現代現象学』にある補足をしたいからである。この書で現象学の特徴付けとして挙げられる「一人称的観点」からの「経験」の探究という点は疑いなくある哲学が現象学であるための最低条件である。しかし、私見によれば、現象学の決定的特徴は、一人称的経験のなかでも前反省的・非明示的な水準のそれを探究することにある。つまり、無意識と呼ばれ、三人称的視点からの科学的探求に解明を任せる他ないよう見える領域を、現象学は一人称的経験に踏みとどまって哲学的に研究するという困難な課題に関わっている。サールが明示

的な先行意図から区別した行為のなかの意図はそういう領域に属し、現象学の実力が試されるトピックだと言えよう。

さて、当日は以下のような内容を扱いたい。

サルは、行為のなかの意図を、知覚や信念と並ぶ志向性の一部と見なし、行為することの「経験」を行為の充足条件の満足という点から説明した。その条件には、腕を上げようと意図しているのであれば、腕が上がっているという身体運動の現前と、この意図によってその身体運動が引き起こされているという因果的自己言及が含まれる。だが、ドレイファスによれば、因果的自己言及は現象学的には（一人称的経験についての主張としては）自明でなく、行為における因果の方向を「心から世界へ」（そして、適合の方向を「世界から心へ」とする）サルの考えは前反省的水準においては転倒されるべきである。テニスのボールを打つとき、私は、打とうという意図のために打つ身体運動を実行しているというより、そこにボールがあるために手を伸ばしているというより良く記述される経験をしているのだ。

サルとドレイファスの両者に学んだ S. ケリーは、前反省的な行為のフローは、知覚された環境が行為をアフォードするという点からより良く説明できるとするだけでなく、この過程に意図と呼びうるようなものはないという挑発的考えを示唆した。彼によれば、タイピストが「F と打とうとして G を打ってしまった」と報告したとしても、その事実は、行為の進行中に F の打鍵が本人に（非明示的にであっても）意図されていたと述べることを正当化しない。

事後的報告には必ずしも依拠できないというケリーの警告を、私は、意図の概念を先行意図に限定する存在論的儉約と解し、ありうる反論からこの立場を擁護したい。つまり、もしタイピストが F を打とうと意図していたのでなければ G を打ったことが誤りであることを理解できなくなる、という反論だ。私の答えは、この誤りは意図したことをしなかったことではなく、不注意だったこと——よく見ていなかった——という点からより良く説明されるのであり、意図の言語は知覚の言語に取り替えられる、というものである。

この見解は、ドレイファスによる適合の方向の逆転と合致するだけでなく、ハイデガーによるアリストテレス倫理学（とりわけフロネーシス概念）の認知主義的解釈にも接近する。さらに、「配視（Umsicht）」概念を中心とする『存在と時間』の知覚論は、行為のなかの意図に代わる「行為のなかの知覚」の現象学的分析だと正当に言える。これらを指摘しつつ、意図の概念の軛からの解放によって、知覚的行為のフローの現象学にどれほど豊かな探究領域が開かれるかを示したい。

志向的経験としての行為——意志の現象学の観点から

植村玄輝

ドレイファスがサルに反対して展開した議論の多くはフッサールにも向けられている。というよりも、ドレイファスのサル批判は、フッサールの志向性に関する見解がサルが『志向性』(Searle 1983) で表明した見解ときわめて類似することを指摘した上で、ハイデガーやメルロ＝ポンティのフッサール批判をサルに適用するというかたちで組み立てられているのである (cf. Dreyfus 1991, 1999, 2000)。こうした事情は、行為のなかの意図が問題となる場面でも変わらない。

ドレイファスのやり口の強引さや乱暴さを指摘することは、さほど難しくないだろう。たとえば、サルが行為を意図と関連づけて論じたのに対して、フッサールが行為論の文脈で取り上げるのはほぼ一貫して意志 (Wille) である。こうした重要な違いを無視することではじめて成り立つドレイファスの戦略は、ひかえめにいっても雑だろう。しかしその一方で、ドレイファスのサル／フッサール批判は、両者の重要な一致を捉えてもいる。というのも、すぐ後で簡単に述べるように、進行中の行為に表象的な (つまり、充足条件によって個別化される内容を持った) 志向性を認めるというサルの考えについて、そのかなり正確な対応物をフッサールに認めることができるからである。そして何よりも重要なのは、まさにこうした共通見解こそ、行為論の文脈でドレイファスがサルとフッサールに向けた批判のターゲットであるという点だ。この問題に正面から取り組まない限り、ドレイファスのフッサール解釈の不備を指摘することは、それ自体としてどれだけ正しいのだとしても、揚げ足取りをしているという評価を免れないだろう。

以上をふまえ、本レクチャーでは、進行中の行為は表象的な志向性を持つという見解を、フッサールの意志の現象学の観点から擁護する (フッサールの行為論そのものについては、Uemura 2015, 123–127 および植村 2015 を参照)。フッサールによれば、進行中の行為は志向的な経験である。つまり、たとえば約束した時間に間に合うように喫茶店に向かうことは、展望台から街を見下ろすことや、不正行為に怒りを覚えることなどと同様に、その主体による独自の気づきを備え、特定の内容を持つことで何かについてのものであるような出来事 (ないしプロセス) とみなされるのである。さらに、進行中の行為を意志経験の一種 (「行為意志 (Handlungswille) 」) とみなすことで、フッサールは、行為が「世界から心へ」という適合の向きを持つというサルの見解に接近する。ここまでは、フッサールの立場はたしかにサルのそれに類似している (ただし、意図と意志の違いを無視する限りで)。しかしフッサールの議論には、少なくともサルには表立って見られない要素も含まれる。フッサールは意志経験の範例を (熟慮に基づく) 決意に求めたうえで、進行中の行為をこの範例と関連づけることで、前者も後者と同様に志向的な意志経験であることを示すのである。ただし、フッサールによる一連の議論は、進行中の行為に関する現象学的な分析からストレートに導かれるわけではない。進行中の行為が主題的には捉えがたいものであることを認め、ある草稿では行為意志は「無意識的」であってもいいとさえ述べるフッサールにとって、そうした経験を (熟慮に基づく) 決意と一人称的観点から比較して構造上の類似性を浮き彫りにするという筋道の議論

は、現実的ではない。進行中の行為が意志経験の一種であることはむしろ、私たちの行為者としての合理性に関する現象学的な視座から裏書きされるのである。

ここで注意しなければならないのは、上に概略を示したフッサールの立場の再構成が哲学史研究として妥当であるかという問題は、本レクチャーにとっては基本的にどうでもいいということである。本レクチャーはあくまでも現代現象学を主題とする。今回私が示したいのは、進行中の行為は表象的な志向性を持つという見解に対してフッサールを手掛かりとして現象学的な後ろ盾を与えることができるということではない。別の言い方をすれば、今回擁護される見解がフッサール自身のそれと一致するという判断も一致しないという判断も、私は本レクチャーの範囲内では下さないでおきたい。しかし、なぜこうした断り書きが必要なのかについては、時間の許すかぎりレクチャー内で触れるつもりである。というのも、現代現象学が（少なくとも現時点では）いわゆる古典的現象学に多くの着想を求める以上、現代現象学は古典的現象学に関する哲学史研究とどう違うのかという疑問には、あらためて明確な答えを出す必要があると感じているからである。また、古典的現象学に依拠しながらも私とは正反対の主張に至るように見える池田のレクチャーとの対比も、現代現象学とは何か・何であるべきかを考えるにあたって重要な手掛かりを与えてくれるように思われる。こちらについては、ディスカッションの時間に触れることができるのではないかと期待している。

文献（要旨内で言及したものに限る）

Dreyfus, H. L. 1999. "The Primacy of Phenomenology over Logical Analysis." *Philosophical Topics* 27/2, 3–24.

Dreyfus, H. L. 2000. "A Merleau-Pontyan Critique of Husserl's and Searle's Representationalist Accounts of Action." *Proceedings of the Aristotelian Society, New Series*, 100, 287–302.

Searle, J. R. 1983. *Intentionality*. Cambridge University Press.

Uemura, G. 2015 "Husserl's Conception of Cognition as an Action. An Inquiry into its Prehistory." In M. Wehrle & M. Ubiali (eds.), *Feeling and Value, Willing and Action*, Springer, 119–137.

植村玄輝 2015. 「行為と行為すること——フッサールとともに現象学を拡張する可能性について」、『情況』第四期 2015年8月号、127–139頁。

『省察』「第六答弁」における「内的認識」について

富樫 駿太郎（東京大学）

本発表の目的は、デカルトの『省察』「第六答弁」に登場する「内的認識 (cognitio interna)」なる語句が示している内容を精確に把握し、その内実を明らかにすることである。周知の通り、デカルト哲学の全確実性は、徹底的な懐疑の末に見出された最初の認識である〈コギト〉の確実性に依拠している。しかし一方で、その認識の確実性を巡っては、17世紀当時から現在に至るまで様々な反論や解釈が提起されてきている。本発表で取り上げる「内的認識」も、そうした文脈で導入される概念であり、これを分析することを通じて〈コギト〉認識がいかんして可能となっているのか、ないしはその妥当性を改めて検討する手立てを得ることが期待される。

あらかじめ思惟とは何か、実在とは何かを知っていなければ、自分が思惟しているということを確知しえない (ATVII413) とする「第六反論」の反論者たちに対して、デカルトはその主張を認めたくて次のように応答している。すなわち、自らが思惟し、実在していることを確知するためには、反省ないし論証によって獲得された知識は要求されず、そうした知識に常に先行する「内的な認識」によって知れば十分であり、そうした内的認識はすべての人間に本有的なものである (ATVII422)。この答弁の内容をいかに解釈すべきかが、本発表における主動的な問いである。

デカルトによる答弁をそのまま素直に受け取るならば、彼の哲学体系における第一の認識あるいは原理として機能する〈コギト〉に先立って、「内的」と形容される仕方で働く何らかの認識が存在していることになるが、そのような在り方をする認識は彼の体系のうちどのように位置付けられるのか。また、それらは懐疑を免れうる身分を有しているのだろうか。さらにその場合、〈コギト〉の第一性は揺るぎないものであり続けられるのだろうか。

こうした問いに解答を与えるためには、まずもって「内的認識」の存在様式が明らかにされねばならず、そのうえでそれらが機能する際の構造を浮き彫りにしていく必要がある。いずれにしても解釈を構築するための鍵を握るのは、「内的認識」がもつとされる本有的な性格であるように思われるが、本有性とはデカルトにおいて本来、観念との絡みで用いられる術語である。そこで本発表では、本有観念との連関を軸として「内的認識」に対ししかるべき位置付けを与えたのち、〈コギト〉の成立に関して、それが果たしている役割を分析することを試みる。

無意識の反復と「解放する」死の本能

——『差異と反復』における無意識の強度的なシステムと三つの受動的総合について——

鹿野 祐嗣（日本学術振興会特別研究員 PD）

ドゥルーズの『差異と反復』第二章は、反復についての考察を軸にして、異なる時間性を構成する時間の三つの受動的総合（現在の習慣、過去の記憶、未来の永遠回帰）、時間の流れを知らない無意識における三つの受動的総合（欲動とその快原理の構成、性欲動と保存欲動への分化とそれらの相補性、脱性化による死の本能の構成）、そしてあらゆる領野に通底する強度的なシステム一般の定式化という三つの主題を扱っている。つまりそこでは、反復の三つの様態がそれぞれに異なる時間性を構成することが指摘された後、そうした反復の三つの様態を用いて、それ自体は無時間的な無意識のシステムの本性が考察され、最終的には無意識のシステムをモデルにしてあらゆる領野に共通の「強度」（超越論的な場に属す力、時空的力動）のシステム一般の素描がなされるのである。以上のような章構成を見れば、また既に序論で死の本能が反復をもたらす超越論的な原理として重要視されていることを考慮すれば、『差異と反復』において精神分析的な反復の問題が大きな役割を果たしていることがわかる。後の『意味の論理学』やガタリとの共著『アンチ・オイディプス』に比べれば分量こそ少ないものの、『差異と反復』において既にドゥルーズは哲学と精神分析を交差させ、彼自身の超越論的哲学や反復の思考に精神分析の発見した成果を積極的に組み込もうとしていたのである。しかもそこでは、反復についての考察を軸に、死の本能（性欲動と混合された死の欲動ではない純粹状態の死の欲動）を物質的な死や無機物への回帰から切り離すことや、そうした死の本能を純粹な差異の力の解放とみなし、反復において救済と落命の双方をもたらさう（差異と反復の遊戯＝賭け）の原理とみなすことなど、精神分析にとっても独創的な理論が提示されており、決して狭義の哲学だけには収まらない射程の広い議論が展開されている。

しかしながら残念なことに、ドゥルーズの思考の独創性や入り組んだテキストの構成、また何より哲学と精神分析の双方についての正確な知識が必要とされる事情から、『差異と反復』における無意識のシステムに関して何か有意義な研究がなされたことは今まで一度もなかった。既存の研究が永遠回帰の反復の考察を避ける傾向にあること（これはただの怠慢である）、また第四章以降で本格的に展開される「潜在的なもの」（超越論的な構造）の概念が、第二章のベルクソン解釈や無意識の第二の受動的総合に関して使われる *le virtuel*（現実的なものに対する「虚的なもの」）の概念と非常に紛らわしいこと、そして否定神学システムという日本の現代思想的な批評論壇の粗雑な枠組みの影響は、ただでさえ困難な条件に拍車をかけてきたと言ってよい。よって今回の発表では、無意識の三つの受動的総合に関するドゥルーズのテキストそれ自体を真摯に読解し、そこでどのような哲学と精神分析の実験が試みられていたのかを明らかにすることにしたい。

哲学的論争において直観はどのように用いられるべきなのか

岸 俊輔（東京大学）

本発表では哲学的な論争において重要な役割を持つように見える《直観》に焦点を当て、哲学方法論を再考することを目指す。まず、直観がどのような役割を持つかを確認し、そこに対して近年提示されている批判の中で《素朴な思考の無視問題》という批判を取り上げ、その検討を通じて哲学的論争において直観はどう用いられるべきかを示したい。

まずは直観が持つ役割を確認する。哲学的な議論で直観が出てくる議論としては、たとえばゲティア事例 (Gettier 1963) や移植事例 (Thomson 1976) などが挙げられる。これらの中で直観はある哲学的主張に対する反例として挙げられている。このような実践が適切なものであるならば、哲学的主張に対して直観に反する帰結があることの指摘はその主張を反駁する証拠になると理解されていると言えるし、逆に、直観に合う帰結があることはその主張を支持する証拠になると理解されていることになる (Pust 2014, Cappelen 2012)。

このような直観を用いる方法論に対しては近年、直観に関する経験的な調査を通じて様々な批判が提示されている。本発表では、その中でも《素朴な思考 (folk thinking) の無視問題》 (Mortensen & Nagel 2014) を取り上げる。これは哲学者の考える素朴な思考というものは実際に普通の人々が持つ素朴な思考とは一致しないことがあり、哲学が知識や道徳性などに関する素朴な思考について探究しているという想定は成立していないという批判 (Knobe and Nichols 2008, Livengood and Machery 2007) である。

この批判はすなわち、哲学者たちが素朴な直観の代弁者として論証や反論を進めていることへの批判であると言える。これに応答して、発表者は次の2つの検討が必要であると考えます。1つは、哲学者の直観のみを用いて哲学的議論を進めることはその目的に対して正当であるかという点である。もう1つは、もし哲学者と素朴な人々の間（あるいは哲学者間）で異なる直観が認められたならば、どちらを採用すべきなのかという点である。

1点目に対して発表者は正当ではないと主張する。仮に哲学者の直観が素朴な人々の直観と一致していたとしても、それは経験的に確認されるべきであると考えられるからである。また、一致しなかった場合には2点目のケースとして以下のような別の議論の必要が生じるのではないかと主張する。

2点目に対しては、常に哲学者の直観が採用に値すると考える理由はないと主張する。そうすると、どちらの直観を採用すべきかについての基準が必要になるはずである。そこで考えられるのは、たとえば他の一致している直観との整合性であったり、将来的に想定される事態における有用性であったりといった基準になるのではないかと主張したい。

D. ヒュームにおける概念規定としての知覚

飯塚 舜 (東京大学)

ジョン・ロックに端を発しデイヴィッド・ヒュームへと至る経験論は、論理実証主義に見られるようなセンスデータによる内在主義的基礎づけ主義の先駆として批判的とされてきた。セラーズによる所与の神話批判やハンソンの知覚の理論負荷性の議論はとりわけ有名であるが、これらの批判は経験をもつばセンスデータの受容として理解することから生じている。

ロック研究の分野では既に、エアロンや富田、ロウらにより「可感的観念 (sensible ideas) / 可想的観念 (intelligible ideas)」ないし「知覚対象 (percepts) / 概念 (concepts)」の区別を導入することでロックの経験論を擁護する議論が広くなされている。しかし、ヒュームにおける「知覚 (perception)」の多義性は、これまで十分に注目されてこなかった。本発表では、ヒュームにおける知覚にはセンスデータに相当するものばかりでなく、概念規定と呼び得るものが含まれると論じることで、上述の批判に対する応答への準備を試みたい。

ヒュームが『人間本性論 (*A Treatise of Human Nature*)』において、知覚やその区分としての「印象 (impressions)」と「観念 (ideas)」、「単純 (simple) / 複雑 (complex)」という自らの道具立てを導入する際に挙げるのはリンゴや赤などの例であり、一見すると知覚は可感的なものに見える。しかし、「十進法の観念」などの数学的对象や、「弱者」や「征服」といったそれらを構成するすべての単純観念を思い浮かべずに推論に用いていると考えられる複雑観念を可感的なものに見なすことは困難である。とりわけ『人間知性研究 (*An Enquiry Concerning Human Understanding*)』において、「幾何学においてある用語が定義されると、精神はひとりでに直ちにすべての場合において、定義された用語の代わりに定義を用いる」、「複雑観念はおそらく定義によってよく知られるのであるが、定義とはそれら複雑観念の部分、すなわち単純観念を枚挙することにほかならない」と述べる際の単純観念は「2つの辺の長さが等しい」といった概念規定であると考えられる。

ただし、概念規定を表す「知覚」の用法を認めるには、いかにして個別の対象を一般的な概念規定によって捉えることができるのかという問題にヒュームの経験論の枠組みから答えなければならない。本発表では、抽象観念と「理性の区別 (distinction of reason)」を論じる箇所に着目し、類似性とそれに基づいて対象をクラスタリングする傾向性、そして言語による安定化に訴えることでこの問題に応答することができると論じる。

以上の議論によって浮かび上がるヒュームの経験論の描像は、センスデータとしての知覚による内在主義的基礎づけ主義ではなく、むしろ知覚の命題的構造を認めた上で、それに用いられる概念は経験によって獲得されたものであるとする概念の非生得説である。

ドゥルーズ『意味の論理学』における物体・非物体の二元論を巡って

内藤 慧 (東京大学)

ジル・ドゥルーズ『意味の論理学』にはストア派哲学に由来する、独自の物体・非物体概念からなる二元論が示されている。本発表では、『意味の論理学』において提示される3つの次元からなる体系に対して、この物体・非物体の二元論がどのように対応し関係するのか、という点を明らかにすることを試みたい。

『意味の論理学』で示されるのは、3つの異なる次元からなる体系的な議論である。①第3の配置：神・世界・自我の3項からなる、われわれに最も身近な経験的次元がここに位置する。ドゥルーズはこの次元を日常的に用いられる「ことば」、「命題」の次元としても考えている。②第2の組織化：経験的な次元としての第3の配置を成立させる「超越論的領野」、「表面」がここに位置する。ドゥルーズは「ことば」「命題」を成り立たせる条件たるこの次元を「意味」と呼ぶ。③第1の秩序：「意味」の次元としての「表面」＝第2の組織化を発生させるとともに、それを脅かし解体させてしまう危険を孕んだ「深層」がここに位置する。この次元には例えば分節化されない音、ノイズなどが該当する。

例えば日常的に使用される「ことば」の形成というテーマに関して、『意味の論理学』は、ノイズでしかなかった音の段階から、それが「意味」を帯び(動的発生)、「ことば」として成り立つ(静的発生)までの過程を記述していく。「ことば」に限らず、経験的次元の成立を巡って、「超越論的領野」と、さらにその背後にある「深層」との関係で議論を展開させる点に、『意味の論理学』の独自性があると言えるだろう。

本発表が目指すのは、以上のような『意味の論理学』の体系的な議論の背景に、独自の物体・非物体概念からなる二元論が設定されているという点である。『意味の論理学』全体を通してドゥルーズはストア派哲学(自然学・ことばの学・倫理学)から大きな影響を受けており、「ことば」の形成を巡る先述の議論も同様であるが、物体・非物体の二元論に関しても例外ではない。『意味の論理学』冒頭において、ドゥルーズはストア派に依拠しつつ物体と非物体的なものとを区別することによって、経験され命題にとっての指示対象となる「事物の状態」から、それらに対して中立であってそれらの発生の条件として機能する理念的な「出来事」の地位を確保する。「出来事」は「意味」と言い換え可能な概念であり、第2の組織化に属している。このように、ドゥルーズにとって非物体的なものというカテゴリーは、経験的なものを成立させる「超越論的領野」のステータスを確保する上で必要不可欠なのであり、少なくとも『意味の論理学』における超越論的なものを巡る議論は、独自の物体・非物体概念の二元性という論点から切り離すことはできないのだ。本発表が対象とするのは、この二元性と3つの次元の関係の内実である。

次元的様相实在論

遠藤 進平 (アムステルダム大学 論理言語計算研究所)

可能世界は实在する。ただし、それは様相なる次元の切片として。

可能世界の实在を主張する様相实在論においては、そこで俎上にあがっている「实在」がいったいどのようなかたちの「实在」を念頭においているか、つまり世界はどのようなものとして实在するのか、ということをお問わねばならない。こと、可能世界とは時空・因果的に関係するもののメレオロジカルな極大だと考える Lewis (1986) の定義づけが有名である。しかし、それは単に、どのように他の世界が存在するのかについての (つまり様相实在論の) ひとつのバージョンにすぎない。

では、様相实在論には、他にどのようなバリエーションがあるのだろうか? その一例として、様相实在論の北極ともいえる Yagisawa (2009) の議論を紹介する。「様相次元主義」と呼ぶべき八木沢の主張はおおまかに次のように要約できよう;

(1 : 形而上学的次元の導入) われわれによく知られている「空間」や「時間」といった次元たちは、それら形而上学次元のある特殊な種類にすぎず、どれもひとしく *real* なものとして实在する。

(2 : 形而上学的次元の一種としての様相次元) 時間、空間と並んで「様相」の次元が实在する。

(このことをもって、八木沢を「五次元主義者」と呼ぶむきもある)

(3 : 次元的様相实在論) 可能世界は、様相次元に沿った切片として实在する。

つづいて、(おもにルイスのバージョンに対する) 様相实在論への批判を列挙し、八木沢バージョンはそれらの攻撃から様相实在論を擁護できるのか、を検討する。はたして、この八木沢の流儀は、様相实在論の擁護にどう「効く」のか? 様相实在論は(メタ)形而上学的にかなり厳しい立場に置かれている。八木沢はその救世主となりうるのだろうか? 本発表は、八木沢の試みを形而上学的次元による空間概念の拡張だと捉えたうえで、そのメタ形而上学的利点として「一様な応用」すなわち「抱擁性」や「つよい外延性」があることを確認し、様相实在論のあるべきアップデートであることを主張する。

なお、本発表が依拠する、もっとも主要な文献は以下の二冊である。

Lewis, D. (1986). *On the Plurality of Worlds*, Blackwell, Oxford.

Yagisawa, T. (2009). *Worlds and Individuals: Possible and Otherwise*, Oxford University Press, Oxford.

ヒューム道徳哲学における「性格」について

尾崎 健太郎（無所属）

デイヴィッド・ヒュームは『人間本性論（以下、『本性論』）』において道徳的善悪に関する評価は理性ではなく感情によって下されると主張した。そして多くの解釈者は、ヒュームは道徳の評価のみならず、道徳的行為についても論じた道徳感情主義者であると考えてきた。たとえば、P. フットが『人間にとって善とは何か』において「ヒュームの実践性要求」と指摘しているように、ヒュームにとっても、道徳は行為を導く特徴を持つと考えられてきた。事実、ヒューム研究者がよく注目するのは、道徳評価を下す際に評価者が抱く道徳感情がどのようにして行為を生み出すのかという動機づけに関する問題である（Radcliffe[1996], Brown[1988]）。

しかしながら、『本性論』でのヒューム自身の議論は「われわれはどのようにして道徳評価を行うのか」といった問題に集中している。つまり、彼にとって道徳的行為の動機づけは少なくとも主題ではなかった。J. B. シュナイウインドが指摘しているように、「ヒュームには行為指針の理論はない」のである（Schneewind[1998]）。

「実践性欲求」をヒュームの道徳哲学に読み込む一つの方策は、それを徳倫理学として解釈することであろう。『本性論』において道徳的評価の対象となるのは行為ではなくその行為を生み出した人の性格であるとヒュームは言う。こうした徳や性格に注目するのであれば、「ヒュームの実践性要求」とは自己の性格を変化させ、陶冶することにあると解釈できる（Reed[2017]）。

しかし、こうした徳倫理的解釈にも次のような問題が残っている。まず、ヒューム自身が述べているように自己の性格を変化させることは不可能ではないにせよ、困難ではある。さらに、周知のようにヒュームにとって「人格（人）」とは「知覚の束」にほかならず、その人の「性格」がどのような存在論的地位を占めているのか明らかにされていない。

これらの問題を解決するため、本発表ではヒュームの道徳論において「性格」が果たす実践的役割を検討する。具体的にはヒュームが描く道徳的な非難が行われる場面を検討することによって、道徳評価自体がどのように「性格」や「人格」に影響をおよぼすのかを明らかにする。

哲学にとってリズムとは何か

濱田 明日郎（京都大学大学院人間・環境学研究科）

日常的な経験においては、リズムの概念は自明なものに思われる。歩くとき、言語を運用するとき、われわれはすでにリズムカルであり、リズムを会得している。この意味で、山崎正和が『リズムの哲学ノート』（2018）で述べるように、リズムはすぐれて普遍的なものである。他方、存在論のレベルでリズムの概念を検討するならば、連続性と非連続性、流れとせき止め、時間と空間、といった様々な対概念をそのうちに含んだ複雑な概念であることもまた確かである。このようなリズムの二つの側面を、どう考えるべきだろうか。

本発表は、リズムの概念が哲学においてどのようなものかを問うものである。この概念はさまざまな哲学者・思想家によって言及されてきたが、ここではアンリ・ベルクソンの著作（『時間と自由』、『物質と記憶』、『創造的進化』）を中心として、19・20 世紀の西洋哲学におけるリズムの概念を探求する。

まずは、芸術論や認識論を扱ったベルクソンのテキストを検討し、そこではリズムの概念がわれわれの経験の契機として重要な役割を果たしていることを示す。ベルクソンは、リズムによる共振・共鳴が芸術の経験に不可欠であると述べるにとどまらず、たとえば可視光線などの物理的な振動が色という質に感じられるのは、われわれの持続（あるいは意識）のリズムの緊張によるものである、とさえ論じているのだった。次いで、ベルクソンにとって「唯一の存在」である持続に基づいて、存在論的なリズムの概念を構成することを試みる。寄り道になるが、「存在とリズム」を主題として掲げながらも、その一歩手前で「あまりに公然とリズムについて問う」ことを警戒するモーリス・ブランショの『厄災のエクリチュール』（1980）での身振りはわれわれにとって示唆的であり、これを先んじて検討する。この際ブランショが念頭に置いているのはハイデガーによる多様な「リュトモス」解釈であった。この「危険」を迂回し、ブランショのいう「差異によって問われることの別のしかた」を追究するにあたっては、同年に出版されたドゥルーズ&ガタリの『千のプラトー』のリズム概念、およびその基礎をなす反復と差異とを検討する必要がある。この作業から、われわれは『ベルクソニズム』（1966）で示される存在＝持続のリズムの多様性を一すなわち持続の存在論的な条件としてのリズムを一理解し、さらには先に述べておいた芸術論・認識論的なリズムの概念を、遡行的に理解することになるだろう。

以上のような検討を通じて、本発表は、哲学的言説のさまざまなレベルにおいてこの概念を検討する意義があることを示すとともに、その存在論的な地位を明らかにすることをめざす。さらにその成果を経験論的な次元にいわば「投げ返す」ような仕方で、より効果的にリズム概念を捉えなおすことを試みる。

識別不可能な二つの個体を個別化するものとして、基体ははたして適切か

大畑 浩志 (大阪市立大学)

1952 年の論文「不可識別者同一性」において、M・ブラック [Black, 1952] は次のような問いを提示した。二つの対称的な宇宙があり、そのそれぞれの宇宙は、ただひとつの球体のみを含むとしよう。二つの球体は、電子の数やそのそれぞれの宇宙における時空的位置等の内在的、関係的性質においてまったく違いがないとする。このとき、すべての性質を共有し互いに識別不可能なこれらの球体を、二つのものとして区別することは可能か。もし可能であるならば、個体の構成に関して、どのような原理が採用されるべきか。

ブラックの提起した問いは、不可識別者同一性の原理 (PII)、すなわち、任意の個体 x と y について、 x と y の全ての性質が同じであるならば、 x と y は数的に同一であるという原理に対する批判として、個体の構成および個別化の議論でしばしば登場する。とりわけ、個体の構成についての基体説は、これらブラックのふたつの球体を区別できること、すなわち、PII を含意しないことが一つのメリットとされる。一方、性質の束説は、PII を含意するとされる。しかし私は、基体説が PII を避けることができるならば、束説も PII を避けることができると主張する。本発表の目的は、少なくとも個別化の議論においては、基体説は束説に対して有利な点をもたないことを示すことである。

本発表のアウトラインは以下の通りである。まず、束説が PII を含意することを仮定し、ブラックの思考実験を真面目に受け取るならば、束説には二つの個体が同一でありかつ同一でないというパラドックスが発生することを確認する。次に、パラドックスを避ける束説の立場として、代用基体説、トロープ説、このもの主義、復元可能な個体説を概観する。これらの立場にはそれぞれ固有の問題があり、したがって、一見基体説が有力な立場として考えられる。しかし、基体説がパラドックスを避けるためには、基体は、必然的に自分自身を「個別化する」性質を持たなければならない。もしそのような性質が存在するのだとすれば、その性質は束説にも利用可能なものであり、したがって、基体説に固有のメリットはないことがわかる。またもし仮に、T・サイダー [Sider, 2006] のように、基体をそれ自体としてプリミティブな個別者であると考えることが可能だとしても、それを受け入れることは基体主義者にとって高すぎるコストである。

《参考文献》

- Black, M. (1952). The Identity Of Indiscernibles. *Mind*, 61(242), 153-164.
Sider, T. (2006). "bare Particulars". *Philosophical Perspectives*, 20(1), 387-397.

カントをマイノング主義的に解釈する試み

繁田 歩（早稲田大学哲学コース博士後期課程）

本発表ではカント認識論における“存在と無”の概念をマイノング主義（非存在主義）の観点から再考することを試みる。研究史を振り返れば、本発表の試みは幾重にも不毛なものを受け取られるかもしれない。その理由として想定される疑念を挙げておこう。

第一にカントは「存在とは明らかになんら実在的 real な述語ではない」（A598/B626）と述べているが、マイノング主義は「存在」という語を一階の述語としている。この点に関しては明確な齟齬が認められるのではないか。第二に、カントの認識論では我々にとって「可能的経験の領域」が論じられているのであって、マイノング主義のように「非存在対象」に関する言明を断じて許さない。したがって、「非存在主義」ともいわれるマイノング派の見解をカントに導入することは本来的に不可能である。第三に、マイノング主義はラッセルやクワインらの記述理論によって既に超克された理論なのである。したがって、もしカントとマイノング主義の関係が認められたとしても、それは現代哲学にとって無意味である。などなど数多くの否定的な意見が想定される。しかし、発表者は以下の二つの問いに関して今一度考察を深めることを通じて、果たしてカントとマイノング主義の間に有意義な関係が結ばれる可能性はあるのかと問いたい。

第一に、カントにおいて「存在」とは何事であったのかを検討したい。「存在とは明らかになんら実在的 real な述語ではない」（A598/B626）という一文は一般的に、カントが存在を単に「繫辞」としてのみ理解することで、伝統的形而上学に認められた「超越範疇」としての「存在」の地位を廃棄したこととして理解されている。しかし、果たしてそうなのであろうか。カントにとって「存在」とはいかなる語なのか。

第一の問いに対しては、マイノングの「独立性原理」、Parsons（1980）で提唱された「核外性質」の理論、さらにカントとマイノング主義との接続を試みた Rosefeldt（2008）の研究を踏まえて、最終的には Priest（2005）の洗練された定式化を利用して応答する。

第二に、カントに本当に「無」に関して語る（非存在言明）可能性はないのであろうか。ここで再検討されるべきなのは、カントが『純粹理性批判』において、特別の重要さはないが、それにもかかわらず「体系の完全性のために付け加えられなければならないこと」として「無の表」を論じていたことである。カント認識論において「無」とはいかなる位置にあるのであろうか。そして「無」を語ることはいかにして可能なのであろうか。

第二の問いに対しては、実際のところ第一の問いに応えることで部分的な解決を提示できるのだが、さらにマイノングの「特徴づけ原理」を厳密化した Priest の理論からカントにおける「非存在言明」の可能性を考察することとする。

ベルクソン哲学における「空間化」の諸相、その第一歩

日隈 脩一郎（東京大学）

本発表の目的は、アンリ・ベルクソンの哲学における空間化概念の射程を、彼の著書『物質と記憶』を主たるテキストとして見積もることである。

最初の著書『意識に直接与えられたものについての試論』（以下『試論』）をベルクソンはこう書き始めている。「私たちは自分たちのことを表現するのに必然的に語をもってし、ほとんどの場合に空間において思考する」と。『試論』は「空間化された時間」を批判的に検討することが主要な目的の一つであった。『試論』以降のベルクソンの哲学は「直観」なる術語により特徴づけられ、実際にベルクソン自身も『思想と動き』に至るまで、直観を哲学の方法だとし科学の方法である分析と対置させている。この直観という語の使用から、あるいはベルクソンに対するある誤った見方が立つようになったのではないかと思う。それは彼の哲学を、おそらく彼自身の生きていた時代のフランスを包んでいたのであろうスピリチュアリズム、あるいは神秘主義に帰す見方である。『試論』を前述のように書き始め、そして『道徳と宗教の二源泉』を遺著としたベルクソンの哲学に、言語に対する諦念を見出し、その上で神秘主義者と見なすのは、なるほど物語作家としては許されよう。しかし、それは妥当であろうか？

一方で、ベルクソンは生前から優れた書き手として名を知られていた。あくまで傍証として、ノーベル文学賞受賞という例を挙げておいてもよいだろうし、より実質的には、当代の実証科学の知見を最大限批判的に摂取した上での他の追随を許さぬ厳密な書きぶり、そしてそこに添えられる印象的かつミニマルな比喻をぜひとも摘示すべきだろう。ある面では語ることに一種のためらいを見せつつ、他の面では言語（より広い意味を込めてロゴスと言い換えてもよいかもしれない）の卓抜な使い手として文学者にも影響を与えた、ベルクソンのこの一見両義的な態度は、彼の哲学の中でどう統合的に実現されているのか。

以上のような問いを抱えながら、本発表では二つに分離したベルクソン像、いわば「やわらかいベルクソン」と「かたいベルクソン」の対比について『試論』における「空間化された時間」の議論に即して論じる。続いて後者のベルクソン像を『物質と記憶』における空間化概念を参照しながら示し、前者のベルクソン像との関係性を探る道筋をつけてみようと思う。そして、後続するベルクソンの著作をいかに「空間化」という概念の視角から眺められるか、見通してみたい。

毒パズル・BMI・恩返し

佐藤 広大 (慶應義塾大学)

本発表の主題である「毒パズル (The Toxin Puzzle)」は次のような思考実験である (Kavka 1983, pp. 33f)。あなたは大富豪に取引を持ちかけられる。あなたが毒を明日の午後に飲むことを今夜の午前 0 時に意図できたら、それだけで大富豪は 100 万ドルを明日の朝あなたに支払う。ただし、その毒を飲んでも一日ひどく苦しむだけである。そして、毒を飲む意図の有無は「脳走査装置 (the brain scanner)」によって判定される。

私の見立てでは、毒パズルは哲学的な検討に値する思考実験である。なぜなら、毒パズルは、哲学的に重要な概念と関わる複数の問いから構成されているからである。本発表が注目するのは、毒パズルを構成するそうした問いのなかでも「毒パズルは原理的に可能か」という問いである。脳走査装置を使って、毒を明日の午後に飲むという被験者の意図を読み取ることは原理的に可能だろうか。この問いに対して、原理的に不可能だと答える立場と、原理的に可能だと答える立場が存在する。

原理的に不可能だと答える立場として古田 [2013] を取り上げる。古田 [2013] に対しては、鈴木 [2016] が疑問を投げかけている。本発表では、鈴木 [2016] とは異なる観点から、古田 [2013] に対して疑問を投げかけてみたい。

一方で、原理的に可能だと答える立場として、被験者の「意図」を読み取って ASIMO を動かす実験を取り上げる (岡部他 2010)。この実験は、脳の信号を読み取って機械を操作することなどを可能にする Brain-Machine Interface (BMI) を利用している。意図が脳の特定の活動であるということ的前提にしている BMI は実用化されていて、意図を読み取る脳走査装置の実現可能性が高まっているようにも見える。しかし、私の考えでは、現在の BMI は、毒を明日の午後に飲むという意図を読み取る脳走査装置の実現可能性をそれほど高めてはいない。

だとすると、毒パズルは論じるに値しないものになってしまうのだろうか。諦めてしまうのは早い。原理的に不可能なおそれがあるのは毒パズル全体ではなく、意図の有無を脳走査装置で読み取るという部分だけだからである。その部分を毒パズルから取り除いた事例 (「恩返し事例」) を M・ブラットマンが挙げている (Bratman 1998, pp. 63f)。一方、D・ゴティエは、毒パズルと恩返し事例は、意図が果たす重要性という点で異なるので、毒パズルを恩返し事例のようなものとして扱うことはできないと主張する (Gauthier 1998)。

もしゴティエの主張が正しければ、毒パズルを恩返し事例として扱うことはできないことになる。脳走査装置を使わずに、かといって恩返し事例に同化させることなく毒パズルを救い出す道はあるのだろうか。

ショーペンハウアー意志の否定についての新解釈を巡って

末田 圭果（大阪大学文学研究科）

ショーペンハウアーは主著『意志と表象としての世界』（1818）において、世界は認識する主観の表象であると同時に、無目的、無根拠な意志であるとした。その上で世界は必然的に苦悩で満ち溢れているとし、苦悩からの解放の状態として生きんとする意志の否定を導入する。しかし世界は意志であるにもかかわらず、その意志を否定するあり方は、私自身を含めた世界の滅却を意味すると解釈されたために、意志の否定は矛盾と困難を指摘されてきた。鎌田康男はショーペンハウアーの意志概念を、私たちの認識の制約である超越論的意志と、自己保存の目的遂行のために働く弁証的意志に分けることでこの問題を回避した。鎌田のこのような解釈は大変有意義でショーペンハウアーの哲学研究を大きく前進させたが、しかしいくつかの問題も指摘できる。従ってまずショーペンハウアーの意志の否定に関する従来の理解を確認し、その上で鎌田による新たな意志解釈による、意志の否定に指摘された問題解決を詳細に叙述し、その功績と問題点を示す。その上で鎌田とは異なる仕方で意志の否定を読み解く可能性を探ることを本発表の目的とする。

意志の否定の内容は主著第四巻を中心にまとめ、その問題点を確認する。また鎌田による意志の否定に関する解釈については、YASUO KAMATA, *Der Junge Schopenhauer* (1988) をテキストとし、その方法を叙述する。その際、鎌田はショーペンハウアーが主著執筆の直前に著した学位論文『充足根拠律の四方向に分岐した根について』（1813）における意志を基に超越論的意志を導出しているため、学位論文で展開された意志について記述する。最後に鎌田による意志の否定解釈の有意性と問題点を指摘し、その上で板橋勇仁による先行研究も参考にしながら、鎌田の解釈に立脚しつつ新たな意志の否定解釈の可能性を述べる。

鎌田の解釈に指摘できる問題点は、以下の三点である。私たちの認識の制約である超越論的意志と弁証的意志に分けることは可能なのか、つまりショーペンハウアーが私たちの認識の制約として意志を特徴づけたのであれば、その働きとは異なる機能をもつ要素を意志とする解釈は可能なのか。意志を超越論的意志と弁証的意志に分けることは正当として、弁証的意志だけを否定することは可能なのか。弁証的意志を否定する仕方での意志の否定は、矛盾を解消しているが、しかし積極的な状態としては語れないのではないかという点である。

このような問題点を踏まえ、私たちの認識の制約である超越論的意志に弁証的契機を含める意志解釈が可能であるなら、そのような意志が暫時、あるいは恒久的に変質することで私たちの認識が変質することとして、意志の否定は矛盾なく示し得ることを結論とする。このような解釈が可能になれば、意志の否定のより積極的な側面を指摘でき、ショーペンハウアー哲学の倫理学への応用可能性も上昇すると考える。

ブランダムの単称名辞論とその射程

朱 喜哲 (大阪大学)

いわゆるネオプラグマティズムの潮流に属する言語哲学において、「意味の使用説」の最新バージョンといえるロバート・ブランダムRobert Brandomの推論主義は有望なプログラムであると目されている。後期ウィトゲンシュタイン的な「使用説」の伝統においては、意味の全体論的傾向を強調するあまり、体系的な理論を提示し、多様な言語実践に即してその理論の説明力を問うという営みがなされづらかった。そんななか、ブランダム推論主義は明確にこうした説明力の観点から問われるべき理論を志向している点に独自の魅力がある。

ブランダム自身「言語と心についての統一的な見解を提示する」(MIExxiii) ことを自らのプログラムの目標としており、彼が与えている推論主義意味論から多彩な言語実践について説得的な説明を与えることができているか、またそれがどのような帰結をもたらすかといった点は、このプログラムの成否をうらなう上で重要である。本発表では、とりわけブランダム推論主義の道具立てでは一見して不得手と考えられるがゆえに重要な言語事象である「単称名辞」の意味論を取り扱う。

単称名辞 (singular term) とは、固有名や代名詞、確定記述句といった、その対象を一意に指示するような機能を持つ。通常モデル論的な意味論であれば、この説明における「対象」や「指示」といったものは前理論的なもの、あるいは理論にとってプリミティブな意味論的關係として導入される。したがって、単称名辞論はこうした理論においてはまさきに説明が可能となるような言語事象である。他方、推論主義においては、意味理解においてプリミティブなのは「推論の実質的なよさ (materially goodness of inference)」である。この立場では文と文の関係である「推論」から出発して、技巧を経てから単称名辞および「指示」や「対象」といった概念について説明を与えることになる。推論主義を採る利点のひとつは、まさにこうした負荷の高い概念をプリミティブに導入せず、独自の道具立てからの説明を与えるという点にある。

本発表では、ブランダム推論主義における単称名辞論を紹介するとともに、従来の単称名辞の取り扱いであるミル説や述語説と比較し、その長所と短所を明らかにする。そのうえで推論主義の単称名辞論から帰結する、単称名辞についての通常の意味論が依拠するような直観とは反する帰結——「原理上ひとつの方法 (ひとつの名辞) でのみ指示されうるような対象についての語りは意味をなさない」(MIE375) ——の意味論を越えた射程を吟味する。具体的には、ブランダムRobert Brandomの師であるリチャード・ローティRichard Rortyが唱えた〈自文化中心主義〉およびそれに由来する「感情教育」論を理解するうえで、この単称名辞論を採用することがもたらす貢献について子細に検討する。

J・S・ミルによる功利性原理の「証明」はミルの功利主義理論のどのような目的に貢献しているか

米倉 悠平 (千葉大学)

本発表の目的は、ジョン・スチュアート・ミルが『功利主義』のなかでおこなった功利性原理の「証明」の議論がミルの功利主義理論の目的全体のうちで果たす役割を、どのようなものにとらえるのがよいか考察することである。

ふつう『功利主義』第4章で展開されたとみなされるこの議論は、功利性原理とミルが呼ぶ道徳的言明が真であることを導く論証として理解されている。ミルの証明への批判も、それらに対する擁護も、ミルの議論を再構成するにあたって多くの場合この点では共通している。だが、このような理解はミルが『功利主義』第1章で次のように述べていることと矛盾なく理解できるものか疑わしい。つまり、「これが通常の普及した意味の用語としての証明ではありえないことは明らかである。究極的な目的についての問いは直接的な証明には適さない」。そこで、ミルが「証明という語のより広い意味」と呼んで意図していた、「知性に対して、その教説に賛成するかしないかを決心させることができるような、考慮事項が示されうる」ということの内実を適切に理解しておかなければならない。

ところで、ふつう道徳理論の目的にはいくつかの候補が考えられる。たとえば Timmons (2013) *Moral Theory* では、道徳理論の基本的な目的として、道徳的な熟慮と選択にあたっての正不正の決定手続きを提供するという実践的な目的と、正しいまたは不正な行為や人などを正しくしたり不正にしたりしているところのそれらの本性を発見するという理論的な目的との二つがあると整理されている。そしておそらく、もし正不正の決定手続きを与える原理と正不正の本性を述べる原理の各々が「証明」を必要とするとすれば、各々の「証明」は相当程度、異なったものになるだろう。

そこで、ミルのいう広義の証明がそのどちらにあたるのかが問題になる。というのも、『功利主義』第1章でこの著作の企図として述べられる「証明」は上の整理でいう実践的目的に貢献するものと読むのが自然であるのに対して、第4章で実際におこなわれている議論はむしろ理論的目的のほうに貢献しようとしているように見えるからである。また、そもそも第4章でミルがおこなっている議論が、(さまざまに擁護されようとしてきたとはいえ) 一見すると明らかに脆弱な議論になっているという別の問題もある。

本発表は、「証明」が抱えるこの二つの問題のうちまず脆弱さの問題のほうを解消するため、『功利主義』第3章の「強制力 sanction」についての議論を、「証明」を構成する一部としてはたらくものと読みなおすことを提案する。そのうえで、この修正版の「証明」が上の整理でいう実践的目的のほうに貢献するものと理解できることを示そう。

なぜ時間と変化は不可分なのか ——フッサール初期時間論における「絶対的意識流」の比喩——

京念屋 隆史（慶應義塾大学）

時間と変化の間には、一方を前提とすることなく他方を理解しえないという相互依存性がある。本発表はこの一貫した視座のもと、E・フッサールの初期時間論『内的時間意識の現象学講義』を解釈する。フッサールの洞察は、変化でも不変化でもありうる出来事の内に変化しないことがありえない時間の流れを見出し、それを時間的順序系列からいったん分離したことにある。この流れは（対象面ではなく作用面に着目して）「意識流」と呼ばれ、「時間図表」の縦軸として、通常的时间直線の横軸に直交するように表現される。

しかし、この洞察は第三章「時間の構成と時間客観の構成」においてあらかじめ裏切られている。彼は複数の意識流を横方向に貫いて、例えば前の知覚内の把持が後の知覚内の把持の把持になる（沈下する \searrow □ という連続性を可能にする、唯一の「絶対的意識流」を考える。この議論の破綻は、知覚に内在する動性を看過し、それ自体変化する知覚から別の知覚への変化という、より高次の変化およびその知覚へと暗黙のうちに訴える点にある。この議論の拒否によってのみ冒頭の洞察は生き残り、現下の (aktuell) 知覚位相（縦軸）だけが唯一の意識流として残されることになる。

以上の予備考察ののち、時間と変化の相互依存性の解明に取り組む。時制および順序系列の理解にはすでに（本質化された）時間の動性の理解が前提とされねばならないが、上述の通りその動性は知覚されるものではなく、出来事内の変化からの比喩によって理解されるものである。この点については青山拓央（2004）「時制的変化は定義可能か——マクタガートの洞察と失敗」などの先行研究があるため、本発表は逆の依存関係（変化の時間系列への依存）に着目する。「過去においてさなぎ、現在において蝶」のように継起的に捉えられた性質的变化はもちろんのこと、とりわけ注目すべきは、ひとつつながりの知覚に収まる変化であっても、それが現在の出来事においてある、という時制的・時点的な相対化こそが変化を変化たらしめることである。逆に言えば、この限界づけなしには、流れはもはや流れでもない何かにとどまる——フッサールが絶対的意識流を「流れ」と呼ぶことを比喩だと述べるのはこうした理由からである。絶対的意識は、時点へと相対化されてはじめて意識「流」になるがゆえに、時間と変化の成立は不可分かつ相関的なのである。このことを、時間系列が（還元ではなく）排去された無限的主観性の眺めとの対比のもと、有限的主観性の時間理解を特徴づけることで示す。最後に、時間図表の二軸の正体を、出来事概念に含まれる二重性（時点における出来事 Ereignis / event・出来事過程 Vorgang / process）として論じる。

論理的真理と永久文

浅川 芳直 (東北大学)

論理的真理、たとえば「 p ならば q である、 q ではない、したがって p ではない」は真である。だが、それはなぜなのだろうか？論理的真理の根拠は何だろうか？論理的真理はその自明さのために、経験的事実とは独立に真な知識、たとえば人間の合理的直観に根拠をもつ特別な知識として理解されてきた。

アメリカの哲学者、W.V.O.クワインは、ラディカルな経験主義者である。彼は、たとえば分析と総合の区別を否定する。彼の見解によれば、科学的信念だけでなく論理的関係に関する信念も、経験的証拠を考慮して、真偽が判断される。つまり、あらゆる知識は経験的事実に根拠がある、とされる。

本発表で、私は、クワインの論理観の解釈として「論理の永遠主義」を主張する。この立場は、クワイン自身が詳しく説明し、擁護しているわけではない。論理の永遠主義は、論理的真理は言語や思考を支配する規範ではなく、永久文によって記述された世界の非常に安定した構造を反映しているとする見解である（永久文：「ドナルド・トランプは第 45 代大統領である」「水は H_2O である」など）。この立場では、論理的真理は経験的事実に根拠をもつが、しかし論理的真理は永久的であるとみなすことで、偶然的真理と区別される。

『ことばと対象』(1960)において、クワインは科学を十分に記述する「正統的表記法」の構築をめざしている。クワインの考えでは、科学的探究は直接的に観察可能な事柄から出発し、いつでも、どこでも真な文をめざす。ここで説明すべき課題がある。論理的真理はなぜ観察された世界の構造を表現する文と言えるのか？論理的真理はどのようにして永久的に真であると言えるのか？

本発表は P.マディ(1950 -)の著作を手掛かりに論理の永遠主義の立場を展開する。マディはクワインの経験主義の後継者であり、クワイン的な観点から論理学の哲学を展開している哲学者である。マディは次のように主張している。基本的な人間の認知能力は、世界との関わりに対応して進化してきたのであり、かつ、世界はわれわれに論理的な構造（主語 - 述語、関係、論理法則……）を提示している。論理的事実は世界の一般的な構造についての事実である。

論理の永遠主義では、論理的真理は経験的事実に根拠をもち、論理学は自然の中に位置づけられることになる。

対話システムの倫理におけるカプトロジの意義

水上 拓哉（東京大学大学院学際情報学府・日本学術振興会

・理化学研究所革新知能統合研究センター）

本発表では、対話システムが引き起こす倫理的問題を分析する上で、B. J. Fogg が提唱した「カプトロジ (Captology)」の枠組みがもたらす貢献とその限界について議論する。

対話システムとは、自然言語によって人間とインタラクションする技術的人工物のことである。もちろん人間と自由に会話できる技術は現在実現していないが、多くの人々がスマートフォンを当たり前のように使いこなすようになった昨今、人々が人工物と「対話」してインタラクションするシーンも珍しくなくなった。iOS 端末に搭載されている“Siri”、ソフトバンクのコミュニケーションロボット“Pepper”、マイクロソフトが開発したチャットボット「りんな」はその数あるうちの一例である。

こういった対話システムの登場は私たちに新しい便利さや楽しみをもたらす一方、従来型の技術とは少し趣向の異なる倫理的問題を引き起こす可能性を秘めている。たとえば、2016年に米マイクロソフトが開発した対話システム“Tay”はTwitter上でユーザの発言を学習した結果、差別的な発言や攻撃的な発言を繰り返すようになったとして話題になった。他にも、対話システムの発言の質が向上すればするほどユーザを特定の行動に導く「説得力」が増大することになり、プライバシーをはじめとするリスクも懸念されている。

しかし、対話システムという技術の倫理をどのように分析すべきなのか、そして対話システムの倫理的設計とは何かについて、基礎的な検討は十分ではないというのが現状だ。対話システムの倫理については東中 (2016) の考察があるが、これはあくまで開発者視点でのガイドラインの提示に過ぎず、対話システムのインタラクションをどのような形で分析すべきかについての基礎的な議論を補わなければならないだろう。

本発表では、B. J. Fogg が提唱したカプトロジ (Captology) を枠組みとして用いることで対話システムの倫理を分析する可能性について示唆する。カプトロジは「説得のためのコンピュータ学」とも訳され、社会心理学的な知見を基礎とした理論である。この理論は、コンピュータがもつユーザの態度や行動を変える力(説得力)が引き起こす倫理的問題を分析することを射程に入れており、対話システムの倫理に新しい視座を提供すると考えられる。とはいえ、カプトロジでは、意図されていない説得を扱いきれないという理論的問題点も存在するため、この理論だけで対話システムの倫理のすべてを分析することは困難であるように思われる。この点については技術の説得を「媒介」の一形式として捉える P. P. Verbeek の媒介理論との比較を通じて検討したい。

フッサール現象学における生活世界の構成と正常性

小島 雅史（一橋大学）

本報告の目的は、フッサールが展開した生活世界概念と正常性概念の相互の関連を明らかにすることを通じて、我々の認識の前提が、如何に構成され、如何に変化していくか、という問題に一つの回答を与えることである。

フッサールは、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（以下『危機』と略記。）において客観的—理論的に求められた学問の世界に対置して、主観的—相対的な直観により把握された日常的な経験世界、即ち生活世界を提示した。この両者の関係は、後者（生活世界）が、前者（理論的に求められた世界）を基礎付けるというものである。というのも、複雑な理論構築はあくまで、我々が主観的—相対的な直観によって構成しているような、いわば粗雑で類型的な対象把握から始まり、そこにこそ基礎をもつからである。生活世界における直観的な対象把握に基づく諸類型こそ、我々が現実になす経験の基準の大部を占めるものに他ならず、フッサールは『危機』において、現実の構成における類型的な対象把握の役割を強調しているといえることができる。

この類型的な対象把握の構造は如何なるものかということを明らかにするために、本報告では、次の二つのフッサールの議論に注目する。第一に、我々の生が持つ帰納的性格に関する議論と、第二に、正常性概念についてである。この二つの連関を以下で概説する。

まず我々の持つ帰納的性格とはどのようなものを概説する。それは、第一に、我々は、新たな経験に際して、常に以前得られた認識に基づく予期を行っており、第二に、我々は、この予期によって経験のうちで得られる対象の姿を、しかじかの仕方で扱いうるものとみなし、多様な対象を、それぞれに馴染みある形で獲得する、というものである。こうした生の帰納的な性格によって、我々が新たに得る妥当性は、既に我々が持っている妥当性の連関に接続され、認識は拡張し続ける。

他方で、この認識の拡張において、知らず知らずのうちに、自身のうちに持つ対象の「通常の」姿に照らし合わせて対象を把握することとなる。これがフッサールの述べる正常性の働きに他ならない。つまり、正常性は、知らず知らずのうちに我々の経験において、基準となる対象の姿を与える働きを持つ。フッサールが、知覚、他者経験、間主観的な共通認識など様々な側面で、この正常性の働きが如何なるものかを検討していることからみて、この概念が対象把握の解明にあたって、一つの核となる概念であったことは疑いない。

最終的には、生の帰納的な性格と、正常性の機能が如何なるものかを定式化することで、それらが我々の認識を条件付けるところの生活世界の構成に如何に作用するのかを明らかにし、本報告の当初の目的に答える。

物語の説明モデルに規範的提言は可能か

苗村 弘太郎（京都大学）

歴史における物語の説明のモデルが Arthur Danto によって提唱されてから久しい。このモデルの提唱とほとんど時を同じくして歴史における説明に関する論争は沈静化している。物語の概念はその後様々な文脈に波及していったものの、歴史における物語の説明のモデルそれ自体が持つ意義はあまり検討されて来なかったと言ってよい。

しかしながら、近年、歴史における説明の問題が見直されつつあり、その中で物語の説明のモデルが再び注目を集めている。中でも本発表は、ドイツの歴史家 Mark Hewitson による議論に注目する。彼は物語の説明のモデルに依拠して、近年の社会史研究が因果関係に関する考察を欠いていることが問題であるという主張を行っている。この批判が成功しているかを検討することを通じて、物語の説明に関する議論が向かうべき方向を考察することが本発表の目的である。

Hewitson によると、言語論的展開以降、社会史研究の関心は文化人類学等の影響により因果関係の解明から過去の文化の理解に移っていった。その結果、多くの社会史家は因果関係に関する問題に注意を払わなくなっているという。このような研究態度には問題があると彼は主張する。彼によれば、因果関係に関する問題設定を抜き、過去の事象に関する記述を正当化することは不可能である。したがって、因果関係に関心を持たない歴史家は自らの記述を正当化できないという非常に問題のある状況に陥っていることになる。

記述の正当化には因果関係に関する問題設定が必要だという主張には二つの論拠が与えられている。第一に、過去の事象の記述は取捨選択を経て選び出されている。Hewitson によればその選択を正当化するのは因果関係に関する問題設定に他ならない。なぜなら、物語の説明モデルによれば、あらゆる物語的歴史叙述は因果関係に関する問いに対する答えになっており、その答えに必要なか否かが事象を取捨選択する基準となっているからである。したがって、因果関係に関する問いを欠けば取捨選択を正当化することができないと Hewitson は主張する。第二に、特定の事象を選び出すという問題を措くとしても、特定の事象の記述も取捨選択を伴わざるを得ない。その取捨選択を正当化する手段も因果関係に関する問題設定において他にないと彼は論じる。

しかしながら、発表者の見立てによれば Hewitson の主張は強すぎる要求となっている。というのも、因果関係に関する問題を脇において事象の変化の過程を主題とすることはごく一般的であるためである。むしろ、因果関係をその中心的主題としない歴史研究を分析の方が見込みのある路線となると本発表では論じたい。

「あいつも差別してるじゃんか」——二階の差別の悪さにかんする予備的検討

石田 柊（東京大学）

「権利」や「デモクラシー」に比べて、分析的政治哲学における「差別」の研究の遅れは顕著である。本発表では、この領野（分析的差別論）にかかる課題のうち、何が差別を悪くするのかという問いに取り組む。

差別の wrong-maker の同定において最も重要な問題のひとつが、通常の差別と逆向きの差別（アファーマティブ・アクション）とを悪さについて区別できるかどうかである。これまで提示されてきた有力な説明によれば、逆向きの差別は、(1) 差別者による被差別者の蔑視にもとづかないから、(2) 被差別者の蔑視を表現しないから、もしくは (3) 優先主義的にみて通常の差別よりも少ない危害しか生じないから、通常の差別より悪くない。

こうした説明を、二階の差別の悪さにも適用できるか。二階の差別とは、たとえば、一方ではアジア人がおこなう性差別に厳しい態度で臨み、他方ではそれと同内容の性差別をおこなうヨーロッパ人には寛容になるような場合のアジア人差別に対応する。我々は、この二階の差別を、一階の差別（各々の性差別）の悪さとは独立に、悪いと評価することができる。それでは、逆向きの二階の差別はどうか。アジア人の差別の悪さをヨーロッパ人の差別の悪さよりも割り引いて考えるような二階の差別は、一階の逆向きの差別と同じ理由で、通常の二階の差別よりも悪くないと言えるだろうか。これは直観に反するように思われる。

二階の差別を認知的差別のひとつとみなすと、上の問題が一階の認知的差別にも該当することがわかる。もし、認知的差別の悪さについては差別の方向が問題ではない（したがって二階の差別もそうである）とするならば、差別一般の悪さを説明しようとする試みは再考されなければならない。本発表ではこの見方の妥当性を検討する。

《主要文献》

- Fricker, Miranda. *Epistemic Injustice: Power and the Ethics of Knowing*. Oxford: Oxford University Press, 2007.
- Horta, Oscar. 'Does Discrimination Require Disadvantage?' *Moral Philosophy and Politics* 2, no. 2 (2015): 277-97.
- Lippert-Rasmussen, Kasper. *Born Free and Equal? A Philosophical Inquiry into the Nature of Discrimination*. Oxford: Oxford University Press, 2014.
- Scanlon, Thomas C. *Moral Dimensions: Permissibility, Meaning, and Blame*. Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press, 2008.

「前提化構造」とその批判：ジョルジョ・アガンベンにおける存在論の問題

中村 魁（京都大学）

ジョルジョ・アガンベンの思想は一貫してアリストテレスとの対決の上に成り立っている。アガンベンによるアリストテレス批判は以下の三つの観点から構成される。①動物的なオイコスと人間的なポリスの分離（『政治学』）、②①の区別が人間の内部に移されたものとしての動物的な生と人間的な生の分離（『魂について』）、③非言語的な現実存在＝第一ウーシアと言語的な本質存在＝第二ウーシアの分離（『カテゴリー論』、『形而上学』）。アガンベンが批判するこの三つの操作が共通して志向しているのは、いずれも動物的な領域を排除しつつも包摂することによって人間を定義しようとする試み（「人類創世」）である。そしてこの「人類創世」を駆動する排除と包摂の論理こそ、アガンベンによれば、本発表の題名に冠された「前提化構造」なのである。

『幼児期と歴史』（1978）から近著『身体の使用』（2014）に至るまでアガンベンは倦むことなく「人類創世」及び「前提化構造」を批判し、そこから逃れようとしてきた。それゆえ論ずべき事柄は多岐にわたるのだが、本発表では上の③を中心に考察する。それはアガンベンによれば「ロゴス」こそが、本来分離不可能なものの分離を遂行するからである。ゆえに三者の中で最後のものが最も根源的であると言える。

本発表は二章構成である。第一章では『身体の使用』でアガンベンが行っているアリストテレスのウーシア論（『カテゴリー論』及び『形而上学』）の読解を検討する。前半部では『カテゴリー論』における第一ウーシアと第二ウーシアの分離の操作に焦点が置かれる。ここでは「前提化構造」の基本形が言語と事物という二項対立の観点から記述されるだろう。後半部は『形而上学』読解に移行する。問題となるのは「ト・ティ・エーン・エイナイ」（以下「本質」）というウーシアの規定である。アガンベンによればこの「本質」が分割された第一ウーシアと第二ウーシアの再接合を行う。この操作において「時間が存在に導入される」とアガンベンは述べているが、本発表ではアガンベンが「本質」の定式内に登場する未完了過去形「エーン」に注目していることを念頭に置き、「時間が存在に導入される」とはいかなることかを明らかにする。

第二章では、前章で説明した「前提化構造」をアガンベンがいかに乗り越えようとしているのかが取り扱われる。ここではまず『到来する共同体』（1990）に登場する概念「なんであれかまわないうもの」について分析した上で、この概念が『身体の使用』に登場するスピノザからの強い影響を受けて形成された「様態的存在論」の枠組において捉えられることを示し、現実存在と本質存在の分離に基づかない存在論をアガンベンがいかに構想しているのを見る。

Moore, J. 2013. "Musical Works: A Mash-Up." In *Art and Abstract Objects*. ed. C. Mag Uidhir, 284-306. Oxford: Oxford University Press.

ハイデッガー『存在と時間』における超越論的問題設定について

丸山 文隆（東京大学）

本発表は、マルティン・ハイデッガーの『存在と時間』（1927年）を超越論的思惟の文脈のうちに位置づけ、それがどのように存在論に貢献しようとしていたのかを明らかにしたく思う。そしてそのために、この著作の全体において「自由」の概念が極めて重要な役割を果たしているのではないか、という仮説を検討したい。

既にこれまで、『存在と時間』をイマヌエル・カントの超越論的問題設定を継承するものとして読む解釈は多く提出されているが、そのうち幾つかは特に第一部第一篇「現存在の準備的基礎分析」の「事情全体性 *Bewandtnisganzheit*」の議論にその典型を見ている。この議論は存在者が現存在に出会われることの可能性の条件を「アプリアリの完了」として取り出すものであるが、しかしその際、現存在の実践的関心が中心的な役割を果たすと主張される。特にわれわれは、この「事情全体性」の議論を、それがどの限りで主張可能な議論たりえるのかを検討したい。というのは、『存在と時間』第一部第二篇「現存在と時間性」は現存在の存在を本来的に了解する仕方を解明するものであって、第一部第一篇の議論はそのための「準備的基礎分析」である。そうだとすると、現存在がみずからを本来的に了解しえない日常性の議論は、どの程度現存在と道具との関わりや相異について適切に述べていることになるのだろうか。どの限りで、第一篇の議論は完結した議論と見なしうるのだろうか。

事情全体性の議論の根底にカント的な超越論的問題設定が存していることを主張する論者のうち、とりわけ高く評価されるべきなのは門脇俊介と M・オクレントである。彼らはそれぞれ、この議論をカント的問題設定の継承として評価するにあたり、第二篇の先駆的決意性の議論との連関を考慮する必要はないと考えているように見える。これらの研究に対して、本発表が付け加えて言わねばならないことは二つである。それは、比較的小さなこととして、ハイデッガーが「事情全体性」で展開している議論は、カントの「超越論的親和性」の概念の改訂版として理解しうるということ、そしてより大きなこととして、こうしたハイデッガーの主張は、「先駆的決意性 *die vorlaufende Entschlossenheit*」の議論によって補完されるべきものであるということ、これらである。

本発表はまず、『存在と時間』における「了解」が「企投」という構造をもつということの含意について確認する。次いで事情全体性の議論を超越論的親和性の拡張として解釈する道筋を示す。さらに、この議論を非本来性の教説と併せて考えることで、先駆的決意性の議論なしには主張されえないものであることを指摘する。最後に、先駆的決意性の議論がどのように超越論的問題設定にとって貢献しうるかを指摘する。

知覚の許容内容と認知的侵入可能性

原田 夏樹（慶應義塾大学）

知覚の哲学において、ひとつのホットトピックとなっているのが「知覚の許容内容 admissible content」をめぐる問題である。伝統的には、知覚経験は色や形といった低次の性質のみを表象し、それ以上の高次の性質（例えば、松の木であるといった種性質）は推論や判断によって導かれるものだと考えられてきた。しかし、果たしてそうだろうか。

この議論の前提となっているのは、現在知覚の哲学において主流をなしている表象説という立場である。これによれば、知覚経験は志向的内容を持つとされる。知覚経験は、世界をあるあり方をしたものと表象し、表象される世界のあり方（表象内容）という観点から特徴付けられるのである。表象説の利点は何より、「その経験を持つことが主体にとってどのようなことか」という現象的性格を、センスデータなどの主観的存在者を措定せずに説明できることにある。この表象説をとることによって、「知覚経験にはどれだけのものが含まれるのか」という問いが生じた。本発表では、知覚内容に低次性質しか認めない保守派に対し、「知覚経験には高次の性質も含まれる」というリベラルな見解を擁護したい。そのために依拠する考え方が、「認知的侵入可能性」という考え方である。

認知的侵入とは、端的に言えば「考えたり信じたりしていることが見ていることに影響を及ぼす」ということである。知覚に先立つ認知状態のおかげで、知覚そのものも変化して見えるということだ。これを認めることで、例えば多義図形のように、「同一の外的条件のもとで同一の対象を知覚しているのに、異なる表象内容を持つ」といったケースについても適切な説明を与えることができる。

しかしながら、認知的侵入を認めることによって、ある重大な認識論的問題が生じる。それは、信念の正当化をめぐる問題である。現象的保守主義と言われる立場によれば、知覚経験を持つことはそれだけで、信念に一応の正当化を与える。知覚経験は、ほかの信念や推論過程を経由せずとも、外界についての信念の正当化に寄与することができるのである。しかし、認知的侵入を認め、知覚経験そのものが歪められてしまうことがありうるとするならどうだろうか？知覚経験が信念形成に対して何か認識的な悪さをしている場合があるのではないだろうか？本発表で扱う第二のテーマが、これである。

本発表ではスザンナ・シーゲルに従い、知覚経験を合理性という点で評価可能なものとする。そのうえで、知覚経験が心理的な先行者によって良い影響を受ける場合と、悪い影響を受ける場合の違いとは何であるのかについて考察する。

物語を生きるということ — リクールの「ミュトス」— 「ミメーシス」概念について—

山野 弘樹 (東京大学大学院)

本発表の目的は、リクールの「ミュトス mythos」および「ミメーシス mimesis」概念を検討することを通して、〈物語を生きる〉という人間の存在様態を解釈学的に検討することである。

フッサールの現象学が「意味の存在」を問う哲学であったとするならば、リクールの解釈学とは「意味の創造」を問う哲学であった。私たちは、常日頃から、何かを「何か」として見ている。廣松渉の洞察から学ぶならば、与件が *etwas Mehr* (より以上の或るもの) として意識される事態は「フェノメノンが一般にもっている構造」であり、こうした理念的な *etwas*こそが「意味」に他ならない。

私たちはこうした「意味」の連関に根差しつつ〈生〉を遂行している。別言すれば、私たちは、世界の意味を秩序づける「物語」を生きているのである。しかし、〈物語を生きる〉とはどういうことなのか。こうした人間の存在様態に対して、リクール解釈学における「ミュトス」および「ミメーシス」概念はいかなる解明の光をもたらしてくれるのか。この点を論じるべく、本発表は以下の構成が取られる。

第1節において、まずは中期リクールの主著『生きた隠喩 (La métaphore vive)』における「ミュトス—ミメーシス」論を検討する。その際、『生きた隠喩』において展開される想像力論や知覚論の分析を援用しつつ、「ミュトス」および「ミメーシス」概念に対するリクールの基礎的な着想を問う。

第2節において、リクール最大の主著である『時間と物語 (Temps et Récit)』における「三重のミメーシス」論を検討する。ここでとりわけ問題となるのは「ミメーシス3」および「ミメーシスの循環」の概念である。特に「意味」と「主体性」の問題に着目しつつ、これらの概念の分析を行う。

第3節において、これまでの分析を総合し、リクール解釈学における「ミュトス—ミメーシス」概念の根本性を明示しつつ、「物語の複数性」という観点を導入し、〈複数の物語を生きるとはどういうことか〉という問いを提出する。

映画としてのアニメーション

藤野 幸彦 (神戸学院大学)

「アニメーション」とは何だろうか。例えば、辞書的には次のように言われる。「生命のない物体や絵に、あたかも生命が宿っているかのような動きを与える技法。またはその技法で得られた映像」(『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』)。「映画技法の一つ。絵や人形などを少しずつ変化させ、1コマずつ撮影し、映写によって被写体が動いているように見せること」(『百科事典マイペディア』)。

これらの定義に対し、私は二つの不満を覚えている。一つ、アニメーションという技法を映画技法の下位概念と見做す傾向が窺われること。一つ、アニメーションの技法が専ら制作の水準で理解されており、生命や動きを感じとる主体としての我々の在り方が過少に評価されているように思われること。

L. マノヴィッチは *The Language of New Media* (2001)において、「デジタルシネマは自身が用いる多くの諸要素の一つとして実写映像を用いるアニメーションの特殊事例である」と述べていた。制作方法の変化により映画と所謂アニメーション作品がかつてなく接近していることは確かであり、今後は更にその垣根は低くなることが予想される——少なくとも、アニメーションを映画のサブジャンルとする視点は以前ほど自明のものではないだろう。しかし、なお次のように問い掛けたい。仮に実写アニメーション(=映画作品)と非実写アニメーション(=アニメーション作品)という区別による分類が採用されねばならないとするなら、「アニメーション」は実写/非実写の双方を包摂する概念であり、また映画の上位概念であることになる。ならばこの意味における、即ち、映画作品とアニメーション作品の双方を基礎づけるべき「アニメーション」とは何か?これが本発表の問いである。

映画が正しく実写アニメーションであり、またアニメーションの下位概念であるならば、現在までにおける映画論の蓄積は、そのままアニメーション論の蓄積として活用されうる。本稿はこの見通しの下で映画論——具体的には1900年代半ばまでに盛んに取り上げられた「リアリズム」に関する議論を再検討する。また映画の鑑賞体験に関する議論を参照することで、製作技法に留まらない「アニメーション」の内実を考察することにした。

「芸術としての写真」の美学が論じられながら、他方でそれよりも厳然たる社会的事実である「写真としての芸術」には殆ど一顧も与えられなかった。こうした W. ベンヤミンの問題意識に本発表は連なっている。即ち「アニメーションとしての映画」ではなく、「映画としてのアニメーション」を語る必要性を示すことが本発表の試みの一つである。

なお本発表はアニメーション作品、即ち非実写アニメーションに関する論及を将来的な目的として含んでおり、今回の映画論に関する検討はその準備として行われるものである。

分割と抽象——アリストテレスから現代まで

木本 周平（首都大学東京）

酒井 健太郎（九州大学）

浅野 将秀（首都大学東京）

「分割法」という方法がある。プラトンは『ソフィスト』や『政治家』において、定義対象としての種 X を定義するため、その X を包括する類 Y をまず措定し、Y を様々な差異（種差）によって限定していくという方法を採用した。プラトンの弟子であるアリストテレスは、この分割法を自身の哲学において批判的に受け継いだ。その際にアリストテレスは様々な領域において分割法の用法を自覚的に変化させている（『分析論後書』における論理的ないし知識論的用法、『形而上学』における存在論的用法、そして『動物部分論』における生物学的用法）。プラトン哲学における分割法研究が後期対話篇の方法論を明らかにするものとして人気がある一方、アリストテレス哲学における分割法はその重要性を低く見積もられてきた。しかし、論理学から生物学までの幅広い話題をカバーするアリストテレス的分割法は、近現代における「抽象」との関係から、その重要性の再考を促されるものではないか。これが本ワークショップの趣旨である。

経験論の登場以降では、トップダウン式に種を定める分割法は一時的に主導権を失う。種や性質などの一般的な概念の獲得が問題とされる際には、経験的に与えられる多様なものから共通性だけを「抽象」することによる概念形成に主役を譲ることになる。例外的には、ライプニッツによる「観念の階梯」やヴォルフにおける「存在者の階梯」には分割法に基づくツリー構造が認められるが、この手法そのものに哲学的な反省が向けられることはほとんどなかったと言える。この流れに対して、ヘーゲルはそもそも類が与えられるための規範的な条件を課し、後の概念形成論の方向づけを与えた。その条件とは、それが類であると言えるためには、それ自身のうちに下位の種への分割原理を含まねばならない、というものである。この思弁的な要請は、自身も現場の科学者であったロツェによってより洗練された形で再提示され、概念形成論という哲学的な 1 ジャンルを形成することになる。

古代・近代における分割法の比較に加えて、上述のような歴史的蓄積が現代において発露しているのだとすれば、それはどこで、そしてどのような仕方で見出されるのか、ということについても若干の検討をしてみたい。この問題について今回は、人工知能研究など、現代の情報科学においてますますその重要性を高めている「知識表現論 (knowledge representation theory)」に目を向ける。そしてそこで用いられる道具立てや考え方を概観することで、分割法という方法それ自体の適用可能性を探ることにしたい。このようなトップダウン式の分割法が時代を超えて比較の対象となることは珍しく、その点でこのワークショップの提示する論点は挑戦的なものと言える。

◆◆ 『哲学の探求』最新45号が刊行されました ◆◆

* 『哲学の探求』は、前年のフォーラムに基づく論考を収めた、フォーラム機関誌です。第42号（2015年度発行分）より、電子媒体での発行をスタートしました。フォーラムのホームページ上にて公開しています。今年度の第45号の『探求』は、昨年のフォーラムでの個人研究発表者による論文6本を収めた充実の内容となっております。

* 『探求』各号の内容目次は、下記ウェブサイトでもご覧いただけます。

* 電子化されていない『探求』バックナンバーのご購入をご希望の方は、お名前、住所、電話番号、ご希望の号数と冊数をお知らせいただければ、こちらから郵送いたします（郵送料は頂きません）。

★フォーラム当日、『探求』バックナンバーを会場割引として1冊800円（税込）、お好きな3冊2,000円（税込）にて販売いたします。『探求』を格安で手に入れるチャンスです！ぜひこの機会にご利用ください。

☆お問い合わせは tankyu@wakate-forum.org までお願いいたします。

◆◆ 若手フォーラム・ウェブサイトについて ◆◆

若手フォーラムに関する情報をウェブ上でも公開しています。情報の再確認、ご学友に若手フォーラムのことを紹介して下さるときなどにもご利用ください。

ウェブサイトに関しましてご意見、ご要望がありましたらお知らせください。

ホームページのアドレス：<http://www.wakate-forum.org/>

◆◆ 寄付・募金のお願い ◆◆

今年度も、フォーラム運営の安定化のために、フォーラム当日には募金箱を設置し、寄付・募金をお願いできればと思います。今後も、フォーラムをより良いものにしていくために、運営委員一同、努力してまいりますので、何卒ご支援のほどよろしくお願いいたします。

◆◆ 2018 年度若手フォーラム運営委員（五十音順） ◆◆

岡城 真代	HP・Twitter	千葉大学
小倉 翔	『哲学の探求』販売・会計	一橋大学
後藤 真理子	通信	九州大学
原 健一	テーマレクチャー	北海道大学
丸山 栄治	『哲学の探求』編集	神戸大学
宮田 晃碩	フォーラム会計・宿泊担当	東京大学
八幡 さくら	総務	東京大学
吉田 佑介	『哲学の探求』編集	東京大学

会場周辺地図



施設内地図（発表会場はセンター棟になります）



二日目打ち上げ会場



司会協力者一覧（五十音順）

飯塚舜	田中凌
五十嵐涼介	朱喜哲
稲岡大志	富山泰斗
岩切啓人	富山豊
遠藤進平	長門祐介
尾崎健太郎	西川耕平
春日亮佑	水上拓哉
高田敦史	八重樫徹
多賀谷誠	
鹿野祐嗣	
酒井健太郎	
清水雄也	
鈴木亘	

司会を担当して下さった上記 21 名の方に深く感謝いたします。

運営委員一同

1 日目

会場	303 号室	305 号室	307 号室	404 号室
8:30-9:00	受付			
9:00-10:15	<p>富樫 駿太郎 『省察』『第六答弁』における「内的認識」について 司会:稲岡大志</p>	<p>鹿野 祐嗣 無意識の反復と「解放する」死の本能——『差異と反復』における無意識の強度的なシステムと三つの受動的総合について —— 司会:鈴木亘</p>	<p>岸 俊輔 哲学的論争において直観はどのように用いられるべきなのか 司会:吉田佑介</p>	控室
10:20-11:35	<p>飯塚 舜 D.ヒュームにおける概念規定としての知覚 司会:春日亮佑</p>	<p>内藤 慧 ドゥルーズ『意味の論理学』における物体・非物体の二元論を巡って 司会:西川耕平</p>	<p>遠藤 進平 次元的様相実在論 司会:清水雄也</p>	
11:35-12:20	昼食休憩			
12:20-13:35	<p>尾崎 健太郎 ヒュームの道徳哲学における「性格」について 司会:飯塚舜</p>	<p>濱田 明日郎 哲学にとってリズムとは何か 司会:原健一</p>	<p>大畑 浩志 認識不可能な二つの個体を個別化するものとして、基体ははたして適切か 司会:小倉翔</p>	(ワークショップ) 分割と抽象——アリストテレスから現代まで
13:40-14:55 (WS -14:20)	<p>繁田 歩 カントをマイノング主義的に解釈する試み 司会:五十嵐涼介</p>	<p>日隈 脩一郎 ベルクソン哲学における「空間化」の諸相、その第一歩 司会:鹿野祐嗣</p>	<p>佐藤 広大 毒パズル・BMI・恩返し 司会:水上拓哉</p>	<p>木本 周平 酒井 健太郎 浅野 将秀</p>
15:00-18:00	<p>テーマレクチャー(309 号室) 現代現象学 池田 喬・植村 玄輝</p>			
18:30-20:30	懇親会			

2 日目

会場	109 号室	410 号室	412 号室	414 号室
9:00-9:40	受付			
9:40-10:55	<p>末田 圭果 ショーペンハウアー意志の否定についての新解釈を巡って 司会:多賀谷誠</p>	<p>朱 喜哲 ブランドムの単称名辞論とその射程 司会:丸山栄治</p>	<p>米倉 悠平 J・S・ミルによる功利性原理の「証明」はミルの功利主義理論のどのような目的に貢献しているか 司会:尾崎健太郎</p>	
11:00-12:15	<p>京念屋 隆史 なぜ時間と変化は不可分なのか——フッサール初期時間論における「絶対的意識流」の比喻 司会:富山豊</p>	<p>浅川 芳直 論理的真理と永久文 司会:遠藤進平</p>	<p>水上 拓哉 対話システムの倫理におけるカプトロジの意義 司会:岡城真代</p>	
12:15-13:30	昼食休憩			
13:30-14:45	<p>小島 雅史 フッサール現象学における生活世界の構成と正常性 司会:八重樫徹</p>	<p>苗村 弘太郎 物語的説明モデルに規範的提言は可能か 司会:田中凌</p>	<p>石田 柊 「あいつも差別してるじゃんか」——二階の差別の悪さにかんする予備的検討 司会:朱喜哲</p>	<p>中村 魁 「前提化構造」とその批判:ジョルジョ・アガンベンにおける存在論の問題 司会:酒井健太郎</p>
14:50-16:05	<p>丸山 文隆 ハイデッガー『存在と時間』における超越論的問題設定について 司会:富山泰斗</p>	<p>原田 夏樹 知覚の許容内容と認知的侵入可能性 司会:岩切啓人</p>	<p>山野 弘樹 物語を生きるということ——リクールの「ミュトス」—「ミメシス」概念について 司会:長門祐介</p>	<p>藤野 幸彦 映画としてのアニメーション 司会:高田敦史</p>
16:10-17:00	全体会(414 号室)			